

都市内街路の評価に関する一研究

大阪産業大学工学部 正員 榊原和彦
 阪急電鉄株式会社 正員 ○石井康夫
 日本国有鉄道 正員 国分信幸

[1]はじめに

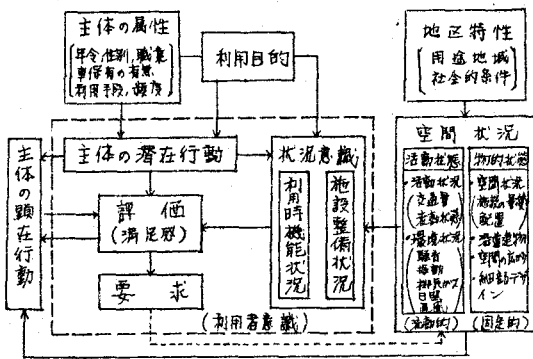
本研究は、都市内街路に対する歩行者の評価意識の構造を、科学的・数量的に把握し、街路の整備・計画における目標の設定、評価基準の設定などのための基礎的情報を提供することを目的としている。

このために、都市内の幹線的街路を対象として取り上げ、アンケート調査により、歩行者の既存の街路に対する評価意識を抽出し、これを統計的に分析し、種々の考察を加えた。

[2] 評価に関する基本的考え方

本研究では、街路利用者（歩行者等）の評価意識形成のモデルを図-1のように仮定して調査・分析を行った。

図-1 評価意識形成モデル



街路利用者の意識は、図-1の破線の内部に示すように、主体の潜在行動、状況意識、評価、要求といった4つのサブ意識から形成されていると考えられる。本研究では、これらの中で特に、状況意識と評価に着目した。すなわち、施設整備状況、利用時の機能状況と

いう2様の状況に対する歩行者の満足意識を測定し、評価構造の分析を行った。

また、これらの意識は、主体の属性、利用目的、空間状況などに規定されると考えられるが、これらと評価意識との関連性、対応関係についても考察した。

[3] 調査内容と分析方法

(1) 調査内容と方法

大阪・京都における26の幹線的街路を取り上げ、それらの近くの会社・官庁に勤務する人を対象としてアンケート調査を実施した。

アンケートの主な内容は、回答者が日常的に最もよく利用する街路の特定の区間に関する満足度の度合いである。すなわち、施設整備状況については、個々の施設（横断歩道、歩道、車道等）の整備状況、及び総合的な施設整備状況に対して、安全性、利便性、快適性、総合満足感といった項目に関する各満足感を質問した。また、各満足感の項目に関する機能状況について、歩行時の交通事故や災害の危険性、混雑や迂回によるゆずらぬし、景観・美観の良さ、などといった事柄についてどう感じるか、あるいは、満足度の度合いはどうかを質問した。これらの質問は、主として段階評定尺度法によって行った。

アンケートの他に、空間状況（歩車道幅員、歩行者交通量、自動車交通量、交差道路状態など）の調査とを行い、アンケート結果との対比とする資とした。

(2) 分析方法

分析は、主として各個別的项目の総合的

項目(外的基準)に対する寄与の程度を考察するために、数量化理論Ⅱ類による要因分析を行なった。その際、サンプル数などと考察して評定尺度を段階によとめて分析を行なった。以下に分析の一部を紹介する。

[4] 分析結果

(1) 施設整備状況に関する満足感の要因分析

図2は、3つのレベルにおいて各項目に関する満足感の外的基準に対する寄与の程度を数量化理論Ⅱ類によって分析した結果である。なお、サンプル数は、457であり、相関比はいずれのCaseも0.725以上であった。

レベルA (Case1) の部分は、施設整備状況についての総合満足感に対する、各評価項目別の、整備状況に関する満足感の寄与の程度をレンジの大きさをもとに矢印の太さで示したものである。レベルB (Case2, Case3, Case4) の部分は、各項目別の施設整備状況満足感に対して、これを規定する個々の施設の整備状況満足感が寄与する程度をレンジの大きさによって示したものである。レベルC (Case5, Case6, Case7) の部分は、各施設の整備状況の中でも特に、横断施設、歩道状態に着目し、これらに関する満足感に対し、個別の施設整備状況満足感などの程度寄与するかを示したものである。この図から、例えば、施設整備状況総合満足感に対しては、特に快適性に関する施設整備状況満足感とい、要因が大きく寄与していることがわかる。

(2) 利用時機能状況に関する満足感の要因分析

図3は、通勤時、散歩時の夫々において、利用する経路に関する総合的な満足感に対する、各評価項目別の満足感の寄与の大きさ、相対的なレンジの大きさ(図の注を参照)で示したものである。この図から、経路の利用目的の違いによって、各機能状況に関する満足感の、総合満足感に対する寄与の相違を知

図-2 施設整備状況に関する満足感の要因分析

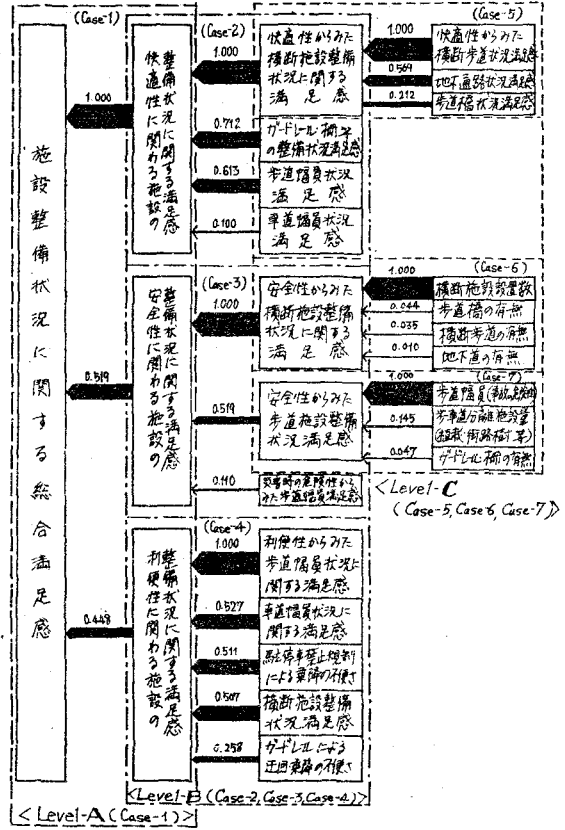
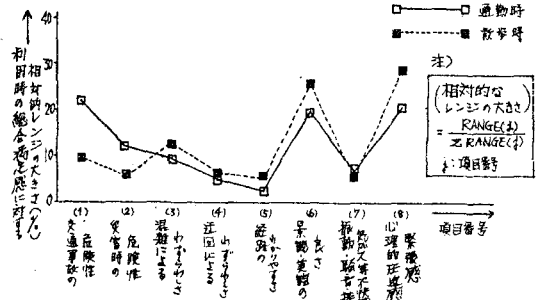


図-3 利用時機能状況に関する要因分析



ることができよう。

[5] おわりに

ここでは、分析結果の一部を示したが、詳細については、講演時に発表する。得られた種々の情報は、今後の都市内街路の整備・計画において有用な情報となると考えられる。